

## Symposium report

36<sup>th</sup> International Symposium on Capillary Chromatography  
(36<sup>th</sup> ISCC) and 9<sup>th</sup> GCxGC Symposium に参加して

竹内豊英

(岐阜大学工学部応用化学科)

本誌の「クロマトグラフィーの散歩道」にも紹介させていただくことになるかもしれないが[1]、イタリアの Riva del Garda で開催された標記シンポジウムに参加することとなった。平成24年5月27日～6月1日の会期で、小生にとっては12年ぶりのヨーロッパへの出張であり、また Riva del Garda での滞在となった。気づいた限りでは36<sup>th</sup> ISCC にはクロマトグラフィー科学会から大塚浩二先生、齊戸美弘先生、リムリーワ先生が出席された。

長いブランクの後の Riva は自分が思っていた、そして期待していたとおりの姿を残していた。街は相変わらず多くの富裕層の旅行客で賑わっており、イタリアはセキュリティの悪さをイメージされる方が多いと思うが、ここではその心配は一瞬にして一掃される。小生はこれまで会場から少し離れた Villa Nicolli に泊まるが多かったが、今回学会が手配したエージェンシーの宿泊リストにはなく予約もできなく、Hotel Portici に宿泊することとなった。帰国間際に Villa Nicolli の近くまで行ってみると、周囲の様相は多少変わったものの同じ場所で営まれており安堵した。

今回、ISCC の組織委員会から招待を受け、12年ぶりの訪問が実現した。ISCC 初日(5月29日)のオープニングセレモニーが始まる直前に場内がざわつき始めた。天井に吊ってあるプロジェクターが揺れ、スクリーンの映像が大きく揺らぎ始めたのだ。だれにもわかるほどの地震であった。後で聞けば、震源地は前回と同じ Bologna の近くだったらしく、死者も15人出たとのことであった。何か不吉な予感がした。少し不安の残る中、オープニングセレモニーが始まり、恒例の Golay Award の授賞式と受賞講演(R. Kennedy, University of Michigan)があり、Novotny 教授の Opening Lecture が続いた。予定よりかなり時間が遅れてプログラムが進行していたが、参加者が楽しみにしている Coffee Break に入った。

小生の講演は、Coffee Break 後のセッションの最後に組まれており、休憩する前にパワーポイントの原稿をコンピューターにインストールして、Coffee Break 会場に向かった。講演会場に少し遅れて到着するとまもなく事前のプログラムにはなかった「Giorgio Nota Award Presentation」が始まった。本賞の趣旨がスライドを使って説明されると、Giorgio Nota 博士が中空キャピラリーカラムを最初に液体クロマトグラ

フィーに適用した研究者であることを思い出した。確か、自分の博士論文にも G. Nota 博士の論文を引用したはずだ[2]。小生のヒアリング力は当てにならないが、2012年3月に彼が生涯を閉じたことを知った。Nota 博士の功績をたたえ、Waters 社がスポンサーとなり、生涯にわたりキャピラリー LC の発展に貢献した研究者に授与すべく新しい賞が創設されたとのことであった。そして、目を疑うことがまもなく起こった。スクリーンに Novotny 教授と小生の名前が映し出され、第1回目の栄誉ある賞をいただくこととなったのだ。事前に何もアナウンスもコンタクトもなく全くのサプライズであり、夢でも見ているのではないかと思うほどであった。メダルを受けるとき少し右足に違和感を覚えた。「これは夢であって欲しかったこと」が起こる前兆であった。

小生の講演は予定より1時間ほど遅れて始まり、空腹の聴衆者も多いと思うと大急ぎの講演となった。講演途中で地震が起こるハプニングもあったが、それには触れずひたすら最後のスライドを目指して走った。

小生のデューティはこの講演で終了した。ISCC 初日の夜には12年前もそうであったようにコンサートが企画され、参加した。クラシックは「四季」くらいしかまともに聞いたことがないと知人に話していたところ、四季が演奏されこれもまた夢のような時間が進んだ。演奏が終わり宿に帰るときには右足の甲がかなり痛くなってきた。Riva に到着する前にミラノで歩きすぎたためなのかと思った。

翌日、朝起きると立つのも痛い症状となり、これがいわゆる「痛風」であることを察知した。講演会場まで歩いて行けるのか、折角ヨーロッパに来て好物のビールも飲めないのかと思うと悪夢のようであった。家族と連絡を取ったところ、NSAID(非ステロイド性消炎鎮痛剤)をできるだけ早く飲むことだという。幸い、近くに薬局があり、その NSAID が売られていた。奇遇にもこの薬物は何年前に学位を取得した社会人ドクターの研究対象の一つであった。薬を服用すると体中から汗が出て、痛みが和らいでいった。薬とはすごいものだと改めて感心した。木曜日の朝からはゆっくりとではあるが痛みもそれほど感じることなく歩くことができた。会場にはたまたま痛風の先輩がいて今後のことについていろいろと教授していただいた。

Closing Remarks で36<sup>th</sup> ISCC には738名が参加したとの報告があった。2013年は米国の Palm Spring で、2014年には Riva で ISCC が開催されるとのことであった。体の管理に留意し、また Riva を訪れる日がやってくることを祈って報告を終えたい。

#### References

- [1] 竹内豊英. *Chromatography*, 投稿中.
- [2] G. Nota; G. Marino; V. Buonocore and A. Ballio. *J. Chromatogr.*, 46 (1970) 103.



写真1 学会会場の前で



写真2 Medal (Giorgio Nota Award)



写真3 会場前の Garda 湖